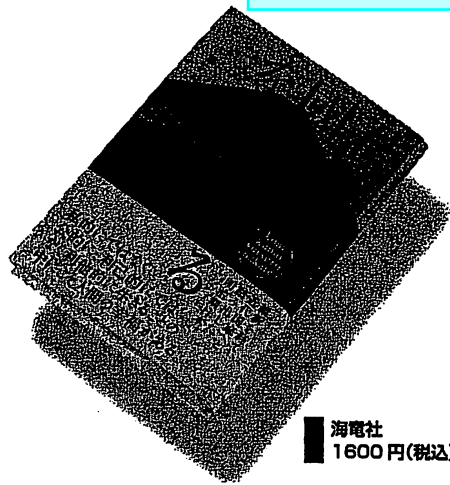


『君、國を捨てるなかれ』

渡辺利夫 著

海電社
1600円(税込)

評者：石井英夫

いしい ひでお
1933年生まれ。55年産経新聞社に入社。産経新聞論説委員時代は、人気コラム「産経抄」の執筆を30年以上にわたって担当した。日本記者クラブ賞、菊池寛賞受賞。著書に「日本人の忘れもの」(産経新聞社)など多数。

尖閣、北方領土、ビデオ流出……などなど、中国とロシアにコケにされて、日本の主権と安全がいかに激しく揺さぶられたか。国民はその危うさを恐ろしいほどつきつけられた。「友愛の海」や「東アジア共同体」などといった柳腰、媚態外交がいかに売国的であったか。国民はその怪しさを嫌というほど思い知らされた。

「坂の上の雲」をみつめて険しい坂道を必死で駆け上がった日本人の魂は、いったいどこへ行ってしまったのか。この本には警世と痛恨をこめた著者の憂憤がほとばしっている。論文だけでなく、後半の松本健一、関川夏央、金美齢各氏との対論で、その憂憤はますます深く肉付けされていくようだ。

か。あの時代にあつて、現代に欠けているものは何か。

それは国の安全保障についての緊張感が減り、責任感が失われたことであると著者はいう。

前者「新・脱亜論」(文春新書)でもあげていたが、今の日本を取り巻く極東アジアの地政学的状況が、開国・維新から日清・日露戦争前夜までと酷似しているようだ。

地政学はヨーロッパでは時代遅れの学問とされているが、今アジアでは不思議なほど新たなリアリティーを持ち始めている。中国はもとより、韓国、北朝鮮、それにロシアまで日本に対し挑戦的外交をもって臨んでいるからだ。

にもかかわらず、日本をめぐる安全保障を、危機感をもって観察する勇気が日本人にはない。核の開発や

保有について、これを語ることにすらいまもタブーになっている——と著者は慨嘆するのだ。

いま、あの時代に学ぶことは「日英同盟廃棄の轍を踏むな」であり、「陸奥宗光の勇断よふたたび」であり、「指導者のポピュリズムを排す」ことだろう。陸奥の提言は「兵力の後援なき外交は如何な正理に根拠するも、その終極にいたりて失敗を免れざることあり」(「蹇蹇録」)だった。外交に軍事力が不可欠であることを断言したのである。

柳腰の民主党政権よ、耳の穴をかつぼじってよく聞け、だ。

「坂の上の雲」の時代は何か。ひと言で言えば、「私」でなく「公」で、「個」ばかりでなく「国」のためにも生きる、それを人間の幸福とした。そういう共生の価値観を共有したことだ

った。

筑波大、東工大の教壇に立ち、現在拓大で長である著者は、「坂の上の雲」をテキストにしてゼミのレポートを書かせたことがあるという。するとほとんどまともに本など読んだこともない学生が、個人の人生と国家の興亡を直に結んだ秋山兄弟のような生き方があったことを知って強く感動する。感動して「公」に生きることの意味を若者も自覚する、そういう教育体験があったようだ。

「公」の精神を身につけさせ、「公」の意識に目覚めさせる。

書名にある「君」は、既成の政治家を指すのではなく、混沌たる価値観の時代に生きる若者たちを指すのだろう。日本の明日を担う若者たちへの切々たる要請であり、懇望であるようだ。